

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1989 5



第88巻 第5号 日本幼稚園協会





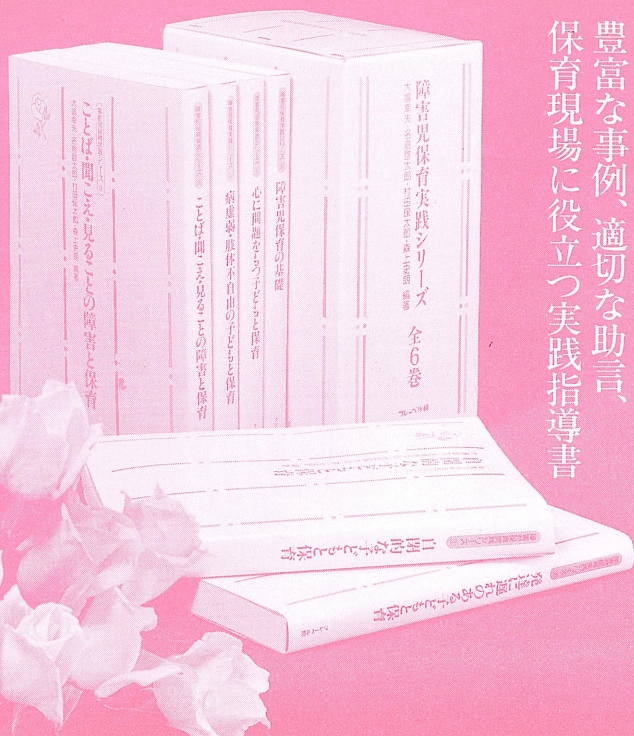
大場幸夫

名倉啓太郎

村田保太郎

森上史朗

編著



障害児としての子の保育に必要な配慮はなにか？  
豊富な事例、適切な助言、  
保育現場に役立つ実践指導書

# 障害児保育実践シリーズ 全6巻

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？ いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。症状も程度也多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。このシリーズは、たんなる理論書や研究書でなく、保育現

場に生かされることを目的とした実践指導書です。

- |     |                    |
|-----|--------------------|
| 第1巻 | 自閉的な子どもと保育         |
| 第2巻 | 発達に遅れのある子どもと保育     |
| 第3巻 | ことば・聞こえ・見ることの障害と保育 |
| 第4巻 | 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育   |
| 第5巻 | 心に問題をもつ子どもと保育      |
| 第6巻 | 障害児保育の基礎           |

A5判・セットケース入り

各巻平均264頁・セット定価10,800円

※上記の価格に、消費税は含まれておりません。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

**フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所  
または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

# 幼 児 の 教 育



第88巻 第5号

# 幼児の教育目次

——第八十八巻 第五号——

© 1989

日本幼稚園協会

〈巻頭言〉

子どもとともに……………藤野 敬子……………(4)

保育の実践の中で「発達」を考える……………津守 真……………(6)

保育の原点を探る

倉橋惣三「保育法」講義録(五)……………土屋とく編……………(12)

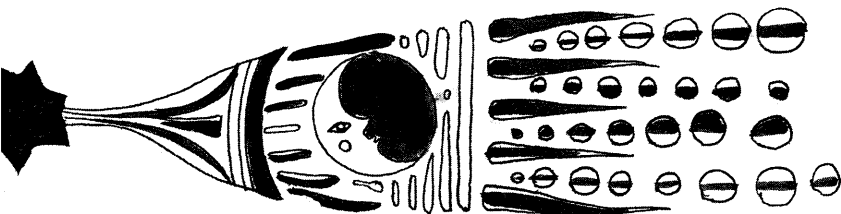
特集・土

大地にふれる……………真壁 伍郎……………(26)

土いじり——有田菊もみ修業に思う……………今井田道子……………(28)

「土」——私の日曜農業……………近藤千恵子……………(31)

“土の匂い”を……………飯島 俊勝……………(33)





土 生き物としての土……………清水 永一…(36)

堅い土、柔らかい土……………豊田 一秀…(38)

「土」——野菜を育ててきて……………石黒 逸子…(42)

子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える(1)……………原口 純子…(44)

イメージ画にみる母子関係 その1

ささえる母ともたれる私……………やまだようこ…(50)

若いお母さんたちへ

初めての道具との出会い——祐子一歳〜二歳の頃……………小蘭江幸子…(57)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

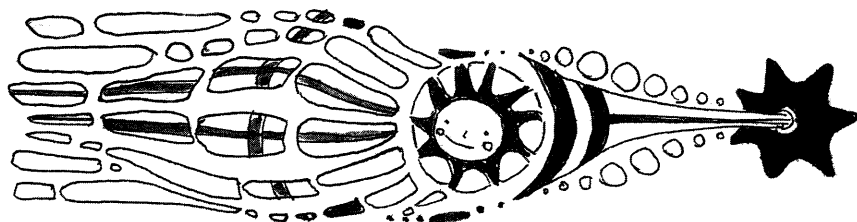
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／村山 英子

上坂元絵里

編集部・向山 陽子 大沢啓子



# 子どもとともに

藤野 敬子

五月の朝、入園以来じっと耐えていた感じの美穂がその日は母親から離れず、帰っていく母親を追って園庭の入口の低い柵にもたれて泣いていました。ずっと門の方へ顔を向けたままの美穂を氣にして、同じマンションの友達が時々、近寄ってきますが、ふり向きもしません。かなりの時間、そうしていてから柵が開いた一瞬に抜け出して、門の方へ歩き出しました。後を追う大人に気づいたようでしたが、そのまま門の外へ出ていきます。こちらでも表通りへ出て、あわててエプ

ロンを外しながらついて行きました。丸めたエプロンを手に歩いている姿を、ちらりとふり返り、おかしうに、ちょっと笑いかけてから歩き出す美穂と、いつものまにか言葉を交わしながら歩いて、ぐるりと角を曲がった所で「ここは小学校の裏門よ。ここから入ると幼稚園の裏庭へ出るの。」「ふーん」「入ってみる?」「うん」ということで、運よく、まだ、かんぬきが閉めてなかった門の扉を、そうっと押して入ると、そこは三歳児の遊ぶ裏庭です。ふたりが何くわぬ顔をしてそこを通り抜け、物置になっている通路をくぐりぬけて表庭へ。そのまま大人が花壇の手入れに戻ったのを見て、美穂も友達の中へ入りました。

ミヒヤエル・エンデが、朝日新聞に寄せた新年のメッセージの中で、中米奥地の発掘調査団のことを読んで時、なぜかこの時の美穂の事が頭に浮かびました。その調査団では、完璧な日程通り、事が運んでいたのに、五日目に運搬役のインディアン達が、黙って輪に



なつて地べたに坐りこんで、脅してもすかしても動かなくなつたのです。二日経つて何事もなかつたようにまた歩き出したのですが、ずっと後になって、少し信頼関係ができてから明かした理由は「はじめの歩みが速すぎたので、わたしの魂<sup>ゴースト</sup>があとから追いつくのを待たねばならなかつた」ということだったので。

美穂の場合も、入園前、まず家庭訪問をして母親と教師が親しくなり、それをそれとなく見ていた子どもが「クラス八人ずつ園へ来てゆつたりとすごしてから入園式を迎えるという、完璧とも思える日程を組んだつもりでした。幸い、泣く子供が一人もいないと喜んでゐた矢先きのできごとでした。日程を滞りなくこなせる代わりに「私たちの魂は、もうはるか以前に、途上に置き捨てられた」とエンデ<sup>エンデ</sup>が歎<sup>なげ</sup>く大人と違つて、子供はいつも魂とともにいようとします。美穂の他にも、それぞれの仕方で魂が追いつくのを待っていた子供がいたことでしょう。そしてそれは入園当初に限ら

ず、いつも起こり得る事なのです。また問題は日程の組み方ばかりではありません。

十一月に、大きくて重い植木鉢を何とか運びこもうと苦心している五歳の女児達を見て、男児達が手伝い始めたことがあります。ところが途中で抜けてしまい、今度はふざけて邪魔をしたりしているのです。あんまり困っていると、また心配して覗きにくるというように、仕事の進捗状況は無視して、まわり道を楽しんでいます。そんな時、もし大人が「困っている友達には協力すべきだ。」と、ただそれだけを強く望んでしまつと、子供の方にも、人間味たっぷりに揺れ動く余地がなくなつてしまふでしょうし、誰に言われたわけでもないのに「やっぱり手伝うよ」と手をさしのべる、さわやかさも失われてしまふような気がします。

子どもとともに立ち止まり、さわやかに揺れ動く風に吹かれていたいと願うこの頃です。

(東洋英和幼稚園)

# 保育の実践の中で「発達」を考える

津守 真

保育と発達とはどのように関連するのかを考える必要が生じ、私は、数週間、保育の実践の中でこの問題を考えた。

## 現象

一年間近くトイレトペーパーをちぎって水洗便所に流すことをつづけていた四歳のT夫が、三学期はじめのある日、トイレトペーパーを自分から大人の手に渡し、このあそびをふつとりとやめ、皆のあそびにぎやかな場所で動き回って遊ぶようになった。それと共にいくつもの変化があった。石を溝の中やフェンスの向う側に投げたいのだが、人にぶつかると危いので私は石を土の塊にかえることに苦心していた。この日、T夫はボールを持って滑り台のペランダにいった。上から落したボールを私が拾って投げ返すと、T夫は口をあけて笑い、ボールを私に投げ返した。はっきりと私に向って投げ、私が投げ返すことを期待している。ペランダの上と下で一時間近くもボールのやりとりをした。翌日登校



したときに、T夫は母親がはきかえさせようとしたくつ下をはこうとせず、ズボンも洋服もぬいでしまった。すべてを手放して自由になったようにみえた。T夫は素っ裸で元気に動き回った。

その数日を境にして、前と後とでは変化がある。石や土を投げることはボールに代った。大人を困らせるトイレットペーパーの遊びを便所に閉じこもってするのではなく、皆の中で動き回って遊ぶ。その行動は社会常識にかなうように変化した。こんなに良い方向に変化したというのは、大人の側からの外的視点である。

実践の中で保育者に気付かれている変化は、外的視点からの行動変化も含まれるが、それだけではない。子ども自身の側に生じている変化があるので、保育者にとって発達として印象づけられるのである。

このことの中で子ども自身が変化している。T夫はトイレットペーパーを自分からしりぞけて他の遊びを選んだ。もはやトイレットペーパーや石にこだわるのではなく、それらから解放され、自分が選択する主体になっている。これは個人の内的発達の視点である。

同じ頃に私の家に遊びにきた三歳のS子は、はさみの刃を両側に開いたまま紙にあてて切ろうとしていた。S子は一週間前にはさみで紙に刻みをいれていたが、この日ははさみを使うコツを思い出せないように思えた。私が親指と人さし指とをはさみの把手にいてやると、S子は苦心して紙を切りはじめた。切りやすいようにと私が紙をおさえる

と、私の手をふり払い、自分でやろうとする。うまくゆかなくとも、自分で注意を集中し時間をかけてそのうちに切ってしまった。この場合も、はさみで紙を切れたかどうかという外的視点だけが発達の見方なのではない。まして、次には輪廓に沿って切れるようにしようとするのが発達の観点なのではない。出来上りは拙くとも、自分で切ろうとし、注意を集中して試みるところに子どもの側の発達がある。

六歳のA子は、何年も遊び馴れたクラスルームで遊ぶことを好む。A子はこの部屋ではいまわり、立ち上り、歩くようになった。庭や他の部屋に連れ出そうとすると声を上げていやがる。それでも私共担任は、空間をひろげることが発達上望ましいことと考えて、一日に一度は他の部屋に連れてゆこうと話し合ったこともあった。けれども、そのはなしはその時かぎり二日とつづいたことはない。A子はいつも過しているクラスルームの中で満ち足りている。自分からその空間の外にゆこうと思わない限り、むりに連れ出してもこの子の世界がひろがったことにはならないだろう。この子の眼が外に向いたときに、たとえ部屋から出なくともその世界はひろがったと言えるだろう。

#### 外から見た発達

子どもの行動が社会常識に近づく方向に変化するのを見ると、これは社会常識という側面から外的に子どもを見る見方である。直線軸の上に同種の行動を並べて、低い段階か



ら高い段階への変化をみるのも外的視点からの発達の見方である。このような特定の側面と規準を定めた外的観察は研究的興味の対象となるが、保育の実践にはすぐわない。この見方をとるとき、大人は関係の外に立つ者となり、保育実践からはなれてしまう。

### 個人の内的発達の視点

外的変化に目を奪われるのではなく、それをしてる子どもに目をとめるとき、子ども自身が変化していることに気が付く。子どもがトイレットペーパーの遊びをしなくなったと見るだけではなく、子ども自身がトイレットペーパーをしりぞけてボールを選んでいるのを見るとき、選択する自由を得た子どもの内的変化を知る。子どもは何かにとらわれ、支配されているのではなく、自分が外界を支配する主体となっている。これは個人の内的発達の見方である。

### 保育的關係の中で見る発達

保育の実践の最中に子どもをみるとき、その場の子どもを見ているのであるが、しばしば、過去における保育的關係の中で見た記憶と重なる。前にはあんな風だったのがこんなに变化したという思いをもつとき、はっきり意識されているのはひとつの側面でも、半分無意識のままに保育者自身を含めた全体像が同時に記憶されている。こんなことができるようになったという保育者の驚きは、子ども自身の内的発達への視線を含んでいる。

保育的關係においては、具体的状況を通してその子どもの理解が保育者自身の中で常に新たに作り出されている。過去の時点でも、現在の時点でも、そのことは同様である。

子どもの側に育ちつつあるものについても、保育的關係の中で知覚されるのは、行動上の発達だけではない。自分が、自分で、自分から何かをするという自分が育っているかどうかは保育者の関心である。そこが育てられていなければ、ある能力だけが向上しても、保育者にとっては不満足である。

### 個人の内的発達と社会

子どもが自分の意志で自由に選択し、自分から発動して何かをなしたとき、その子どもは堂々として自信があり、幼くとも一人前の成熟した人間の風格がある。それぞれの時期の小さな世界に、それなりの成熟があり、将来に開いてゆく小さな核がある。大人の世界ならば、自由、勇氣、忍耐などという語で表現するような、人間の内部のものでありながら、社会をつくるのにたいせつな価値である。内部にそれを育てられている人は、社会を展開させる人である。個人の自我の発達と社会とはここにおいて結びあう。

社会は、身近なところで言えば学校であり、保育の場である。個人の自我が育てられ、子どもたちが自分で遊べるようになるとき、その社会は力動的に展開する。その力動的な保育の場が、また、個人の内部を強め育てる。

保育の場の小さな世界のできごとは、大きな社会を動かす大人につながっている。

A 子はまだ自分から部屋の外に出ようとしないけれども、外から入ってくる大人たちが A 子に笑いかけ、話しかけ、しばらく遊んでゆく。こうして過すうちに、部屋の中にとどまりながらも、外側の世界に対する関心は A 子の中に準備されつつあるにちがいない。

T 夫がトイレットペーパーにとらわれ、こだわっていたときにも、保育者はその最中の T 夫の世界を感受していた。吸いこまれ流れ去る水の音、次々に紙片を手放す体感など。T 夫が保育者と共にそれらを確認する日々があった。そのときには保育者とその子どもは共同の場から孤立しているようにみえる。不思議なことに、その積み重ねの中で、子ども自身がそこから解放され自分で選択して遊ぶ日がくる。そうなると、子どもも保育者も共同の場のダイナミズムの中に加えられる。共同の場は、常に、孤立したようにみえる部分を内に含んでいる。自分で遊べない子ども、とらわれた自我、弱い自我の者を、共同社会はいつも自らの内にかかえている。そこに保育的配慮が生まれる。自分たちの中にひきこもうと外から力を加えるのではなく、弱い自我の者が自分自身となって生きられるように、守り、共にあり、育てる機能をもっているのが人間の共同体である。

(愛育養護学校)



保育の原点を探る

倉橋惣三「保育法」講義録（五）

記録

田村 薫

菊池 ふじの

土屋

とく編

一号記載

第一章 幼稚園

第一節 幼稚園の目的 第二節 学齡前の教育 第三節 保育の意義

第二章 保育方法の原理

一、自発生 二、具体性——幼兒生活の特色と生活原理

二号記載

保育方法の原理 つづき

### 第三章 保育法の原則

一、間接（教育）の原則 二、相互教育の原則 三、共鳴の原則

四、生活に依る誘導の原則

### 三号記載

第四章 保育方案 第一保育項目 第二 仕組み

第五章 保育項目

一、製作

### 四号記載

製作 つづき（芸術的誘導 産業的誘導）

二、観察

### 本号

観察つづき 三、談話 四、遊戲及び唱歌 五、遊戲

### 観察の実際

実際のままの中に於いて観察をする。

豊かに置かれた事物は、すべて真物である。自然のま  
まが良い。それには田舎が理想である。観察をさせ様と  
計画すれば、物までも故意におかれたものの様に感じら

れる。

これではなくて、ただ、あるがままのものを観察させ  
て、物を子供へ持つていくのでなく、子供を物の所へ連  
れていく。

自然の物の中に子供を連れて行った時、果して子供が

終

観察するであらうか。

先生が、そのものに興味と注意を向ける事に於いて、子供を導くのである。自然の中に放し置いてはいけない。先生がその観察をしている生活の方向に向かって、子供に引きずられていく。先生の態度の方向へ、子供も向いて来る。

後ろ姿でする教育である。

先生の生活の真実な態度では、大きな子供は導けるかも知れぬ。併し年少の者には純粹なものでは、掴みどころがないから、先生はその興味の中心を指示してやるのである。

先生の指示は子供の興味を、その方向に向ける一つの途である。

併し子供は以上の様に見るとか、聞くとかと温和しい。

態度に留まらず、実際にいじって見、扱う事に依って自ら、見、聞くのは生活の中の観察として必要である。故に飼育、栽培等をさす。

けれど子供にのみさせておいて、放って置くのはいけない。自ら観察出来る様に誘導してやる。

以上は理科と異なり生活として心理的作用として、観察をさせていき度い。

○ 観察に於いての先生のねらいどころ

弁別、比較等をねらう。

鑑賞するには他と比較してするのではない。之は只そのものを見るのである。又、或る事柄については、それを楽しむと云う事にもなる。一途にそれを、それとして見ているのである。その事に向かって絶対的には入っていくこの態度と、弁別、比較の態度とは反対のものである。

物を見れば、ずっと比較の方に働いていくと云う性になる様にする。

人間には鑑賞性の人と、比較的傾向の人とがある。之は人間の持つべき傾向として種々あるが、その折々に出て来なければならぬ。が、現代の教育に於いては、比較的傾向が養成されすぎる。幼稚園に於いても、鑑賞能力



を養成したい。保育項目の中でも、お話等は鑑賞されるべきものである。又、音楽等も同様である。

斯様な鑑賞能力養成と相まって、比較能力の養成も大切なのである。始終先生が、この比較弁別を有している、他の物をも持ち出して来て、比べてしまう傾向が出て来る。意識的に他と比べると云うのでは良くない。自然に、無意識的に、すぐ比較能力が働いてしまう。弁別能力のある者は、頭を整える事にもなる。

故意に比較物を並べる必要はない。ただ自然に、この能力を向けさせる様にする。

比較弁別をねらいどころにする事は、幼稚園に於いて観察をするに当たり、先生の持つべき心的態度である。

### 三、談話

二つの意味が考えられる。

I、は普通の談話であって、人と人との間に両方から話されるもので、話合い、互い話、会話等である。

### Conversation

II、は所謂「おはなし」であって、おはなしとして出来ているものを子供等に語り聞かせる。 Story Telling

I、を更に分けると

A、行われるままに行わしめて、それに保育上の価値を充分に認めていく。

B、保育上の目的を持って来て特に行わしむる話合いとがある。

A'、生活の中に行われていく保育としては、当然過ぎる程行われて来る事であるが、而も実際に於いては、保母は、幼児に話す事の多きに比して幼児と語る事は少ないのである。

「と語る」事は、幼児の話かけて来る事を聴くと云うのに重きがおかれねばならぬ。

即ち、聴き手としての保母の任務、技量が強調されるのである。

よき聴き手は必ず返事の上手なものである。

即ち、聴く事によって、相手を愈々語らせてやる人である。

ある。さて之は何時起こるとも、何処で起こるとも分らないのである。随所に起こるのである。

故に全く機会捕捉の原則に依るものであって、特にこちらから作り出した機会により行われるものではない。

併し、又、良き聞き手であるのみならず、良き話しかけ手である場合には、その機会をこちらより作る事が出来る。話しかけて来る事の少ない子には、特に之が必要である。

併しこの場合でも、出来るだけ生活の中に自然に行われていく様にする事が要訣である。この自然会話の中に於いて表れる保育効果は、大きく二つの方面がある。

(1)は話を通して訓練せられる人対人の親しみである。親しみがある故に、話す話の中に於いて親しみが味わわれるのである。

さて話の内容が何であるかは問わず、又話し方が何等重大な問題でもない。その意味に於いて、所謂実質的教育価値とは、趣を異にするものである。

## (2)ふたつめの価値

①子供をして表現の意志を強からしむ。

②表現方法に馴れしむる。

a、語り方

b、発音

c、言語

③子供をして、その観念的内容を自らに明瞭ならしめ、又、自己訂正の機会を与える。

以上は話合いが、さながらに行われる場合。

B'、併し、特に之を計画的に行う事もある。

一定の時間を定めて話合いを試みる。

之も保育全体の要諦として、出来るだけ故意らしくしない事は大切であるが、前の本当に自然なる場合に比すと、問い掛けられる事の多い形になるであろう。

之が強くなると、問答の時間などと言う。この場合の保育価値は、前者に於ける価値の二つ共が含まれるが、前者に於いては一が主になり、後者に於いては二が主になる。

此に於いて、発表、言語、発音、観念、練習が主とし

て行われるのである。

さて、特に方法的に行われる会話も有効なれど、もし生活の中に話合いが充分の機会をもつて行われ得るならば、それで、その効果を上げる事も出来るのである。保母としては、この効果をあげる様、意を用いなければならぬ。

実際としては、保母は、良き聞き手でなければならぬ。向こうの話しに上手に適應する様に、又、次の話が楽に発せられる様な態度をとらなければならぬ。

根本として大切な事は、向こうの言う事に共鳴する事であり、幼児の心理、興味等を知らなければならぬが、こちらに相当のゆとりが無くてはならぬ。

又、こちらより話しかける、向こうの言い度いと云う気持ちをも、ほどこいていく様な事。

この両者は共に人間の親しみが、本質なのである。

故に内容の無いものでよい。唯つなぎであればよい。唯親しみで受けてやり度い。用件なのではない。彼の出した親しみは、その場合に於いてすぐに受けてやらねば

ならぬ。

フランス等で特に会話の時間と云うものを設けて、Bの価値をあげさせる様にしている。之は必要であるが、之は余り強くすると「言えは訂正される」と云う觀念が重くなって、話をすると言う人間關係が遠くなってしまう。

先ず大体今日に於いては、こちらは正しい発音をして、向こうの言った言語は一度そのまま受けてやるのである。何処まで訂正すると云う事は、程度問題、併し親しみが崩れない以上は、正しくしてやり度い。

## II、おはなし

内容が教育的であり度いとは思ふが、更に要素がある。子供が如何なる心理で、お話にふれるであらう。

先生は内容本意にやっといこうとするが、子供は他にも考えがある。

1、話は聞いている事によって、先生との親しみを楽しもうとする。之は互い話の如く、相互的には行われて来ないけれども、ことによると、互い話の場合よりも深刻

なる場合で、その関係が保たれる。

保母は常に、この意味を忘れない必要がある。話が主である事は勿論だが、話し手と聞き手との間にとり交わされる親しみとは、重大な事なのである。又、始終聞いている中に、愈々親しみが出て来る。

家庭生活に於いて、母からお話を聞くのと同様の感じが頭の中にある。

幼稚園でも、母子の如くでないにしても先生と子供とは、話の前から親しいのである。

故に話は手段であり、その先生の人が本体なのである。話しながら如何に親しみを出し得るか。幼稚園に於ける話の態度は、子供達の親しみの態度を満足させる様にすべし。

内容と方法にのみ工夫を凝らすと、この大切な事が忘れられ勝ちなのである。

子供が先生のお話に聞き寄って来る程の仕込みを取り度い。親しみの間に話が出て来る。話をする事の好きな人と、子供に話すのが好きな人とは少し違う。

聞かせる話には、深刻な味わいがある。互いの話とは、心の中の親しみが外に形となって現れる。之、一つの社交である。

まとまった話をしてやる時には、子供は実に気持ちよく味われるのである。

2、話をして貰う事に於いて、現実の生活から、しばし離れた世界に置いて貰える愉快。

我々大人も、小説、芝居、映画に依って現実から離れれば楽になるのである。

目的、義務、意味のある現実が窮屈である。現実で忙しい者程、楽な世界を求めるものなのである。

子供にもこう云った愉快があるのである。気楽な世界に置いてやる事が大切なのである。

大人が子供にしてやる事の中で、子供は別に喜ばぬが、こちらから目的を立ててやる事がある。併し、両者共に一致するのであるなら、それが一番良いものである。

保育項目として選ばれているものは、大体において之

である。特に談話はこれである。

与えんとする目的と、悦び求むる理由とが、全部同じであると云う事は難しい。併し、之が全然食い違っていると云う事は保育の本質として宜しくない。

大人の心持ちを子供に理解さす事は難しい。そこで、子供の求むるものを、尊重していくという事が重要である。求むる理由に立脚して、話をしていかねばならぬ。最も理想なのは、両者が合致する事であるのは云うまでもない。

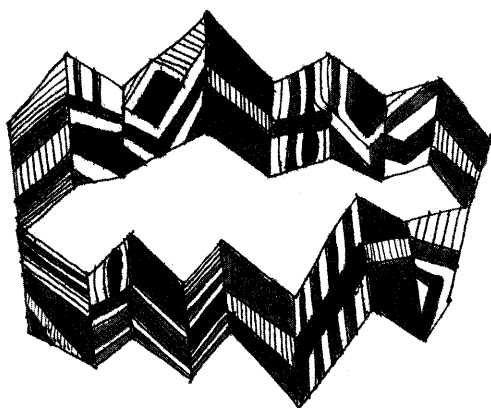
話の目的として大人の重要な点と思ふ点は、それに含まれている教育的意義であらう。(知識、道德等)

(教育童話、宣伝童話になつてしまふ)

けれど「何故、話をするか。」の問題に於いては、こちらから立脚せずに、子供が「どういう理由で話を聞き度がるか」と云う方面から考えてやり度い。そして大人もその心になつて話してやる事は、話をする為の大事な事。

子供の求むる理由が先に挙げた二つである。

(1)、彼等には、先生が考える様な功利的、結果的考えを持つていない。子供の中には、先生との親しみを、も一つ欲しいのがあるかもしれない。又、先生の愛に飽き飽きしている子、先生の親しみを何とも思はず安心している子、又、時には先生の親しみを味わい、証明して見る



子もある。

が、彼等は皆先生との親しみを喜んでいるのである。

その親しみの味わいの方法として、「話」があるのである。

互い話が親しみの交換である事は勿論だが、この話はややもすると内容に捕われて、親しみの交換である事を先生が忘れてしまい易い。話の選択には目的を考えてするがよい。然し、子供の前に立った時には、ただ親しみと云う結びつきがあるばかりである。

話と云うものには、技巧が重大であるが、子供が話を楽しむ時には、それよりも先生の話をしている顔を見つめる事が楽しいのである。

「如何に親しみが子供に満たされるのであるか」が最も重大な問題である。

こちらの目が先方の目を捕（catch）える事が大事である。

目を捕えてそれを監督するのがある。

自分がひきつけるのを外さぬ為に見るのがある。此れ

ではない。こちらの目を持っていかねば相手の目が受取れない。向こうから、こちらを見せる。

(2)、は云わば芸術的な事である。

現実から離れると云うゆるやかな気持ち。

子供を現実から離してやるのが目的で話しているのでないが、子供の求める気持ちの中に、気楽さを求める気がある。現実からの離れた気楽さである。

子供が求める一が気楽さであるなら、する方もその気持ちになって気楽にしてやり度い。

(3)、我々は子供を喜ばせると云う事が唯一の願い。

彼等が話を聞いている時は、受身の生活ではない。発動・活動の生活である。座って行儀よくはしているが、之は外部であり、内部生活に於いては非常な活動をしている。彼等は聞いている楽しさでなく、人に話をしてもらって、自分がするよりも多く自分の心を働かす楽しさである。働く心の作用に二つある。

A、表現活動||子供は自らの心の中に持っているものを話し手によって、表現の愉快を味わうのである。子供



の心の中に表現しよう、外に表わそうと表そうとしているものがあるが、印象も薄いし、表現の術もないのを先生が表現してくれると、願っていたものが、表現された満足である。

普通我々が考えると、不思議な珍しい話が喜ばれ、かねてある世界の話は面白くない様である。

①、日常馴れているものを話して貰うと、彼等は喜ぶ。

生活を迎える話、彼等の心に表現の機会が与えられる。

②、も一つ知っている話を聞かされる悦び、之は自分が表現している様な気持ちで喜んでいる。

B、想像活動Ⅱ次から次へと自分の想像をめぐらしていくものである。「大きい」と云って「大きさ」を想像させていく。聞いている筈の彼等も実は、話を作っているのである。先生のしてくれる話を機会として、子供が話を作っている様に仕向けてやる。

早口の先生は不適當である。適当な速度で話したら、適當の時にポーズをしなければならぬ。ポーズの扱い方で子供のイマジネーションを自由に運轉する事

が出来る。

向こうの心の引出し役、手伝い役でなければならぬ。

幼稚園に於ける話は、こじんまりと出来るだけ技巧のないお話をすべきである。手の表情、声色等はしないでよかろう。

「話」は事実でないと云う共通性がある。

子供等はその事を受取ればよいが、そのまま幻想に入らずいる様な子供が、大きい組の子供、又は性格によっているものである。

その場合どうしたらよいものであろう。

自然の子供の心理状態が現実を求めると云う事と、先生の話のまずい事、先生自身が話を実感していない場合に起こるのである。故に先生は話に実感を持つ事が大事である。

話と云うものは、話に含まれた意味が主になって話の組み立て等は、その意味を表現する手段だと考える風がある。意味は大切だが今している話は、仮のものである。

故に話し手には真実がない。話とは内面の意味が主でなくて、今、話している光景を伝えるのが主なのである。

その光景を、見て来たように真実に話す「見て来た様  
にうそをつき」。見て来た様な気持ちで自分が話さなければならぬ。見て来たままを忠実に話すと云う真実性がなければならぬ。

聞いている人に、見て来たままを見せていく、作り話ではあるが、見せるのである。見て来たと云う真実性が乏しいと、子供は作り話である事と云う事を、すぐ感じてしまう。

が、もし子供が現実在即する事を考えて疑ったなら、何でも恐れてはならぬ。ぐんぐん押して行つて真実性を壊してはならぬ。併しあまり科学的に離れた奇想天外の事を言わぬがよろしい。

ドイツの或る傾向として幻想的でないものを好しとするものがある。ロシアにもある。

一般的には、それが起こり得るかどうかは分からぬが、その場合はそうであった、としてしまう。

「うそだか本当だか」の問題を持ち出す事のないまでにしてしまう。話の中に出て来るものとしては、それがそれではならぬ必然性があるのである。

子供が、どうかすると嘘だと思ふのは無理もない。併しその場合先生がたじろぐと、子供は「うそ」と言つて先生を困らすのを快感とする様になる。

自分で実感を伴わぬ様な話はさけるがよい。

又、話をしながら子供と問答をする事がある。問答話とは、話の中に互い話を入れていく、しんみりした方法である。故に良い事ではあるが、話は話としてずっとやってしまった方がよい。大体は問答はしない。

お話をしている場合に、話の中で解釈をしていくか、どうか。解釈はしない方がよい。

もしも余り分らない様な事を言つた時は、その時に解釈しないで、お話の中に入れて分る様にしてやり度い。その間に話を追ひ出してしまふ事は良くない。

話の中で先生は、直接叙述が良い。それに関する先生の感想等は、なるべく避けねばならぬ。説教をするので

はない。主観的話であつてはならぬ。

話し手の感激、感想等を入れるべきでない。

#### 四、遊戲、及び 唱歌、

この二つは合用される事が少なくない。

唱歌に就いては難しい問題がある。今日一般に考えられている唱歌教育と云うものは、幼稚園ではやらぬ。

西洋音楽の楽音に基づく、歌い方の教育、この楽音なるものは、科学的なものである。之を厳密に教育しなければならぬとすれば、他の保育項目の如き態度をとる事は出来ない。どうしても厳密なる練習主義によらなければならぬ。幼稚園に於いて、之を積極的になさなければならぬと云う事は要求せられないとしても、単なる自発的の、いわば興味本位の歌い方にまかせておく事が、この厳密なる楽音練習を妨げはしない。

仮に、その点に周到なる考慮を用いるとして、果たしてどの程度に実行していくべきか。この事が問題になる。唱歌を唱歌として本当に尊重するのであったなら、

考慮せねばならぬ。即ち練習的になつてしまふ。

幼稚園では之をする事が、良いだろうか。只そういう問題を考慮して、消極的にやる事にする。

1、我々先生は正しく歌わねばならぬ。楽音は耳から入るものだから、正しい音に馴れさせてやる。

子供等に喉の練習をしてやる事は難しいが、耳の方からは正しいものを入れてやる。先生は必ず楽音で歌いたい。その一例として蓄音機を用いる。

耳の方の教養をしていく。

2、子供に歌わせるについて、日本では余りどなりすぎる。

静けさの中で、その興奮を音楽的に歌わせる。

静かに歌うと云う事をしつけない。

3、遊戲と合併される唱歌に於いては、動作が伴うのであるが、歌を歌として歌わせる時には、姿勢、態度、行儀に気をつける。

時々、少数の子供だけを出して、楽音の練習とまではいかなくても、歌を本当に歌わせ度い。

子供としては、氣持本位の歌い方になり易い。

音楽的に楽な融通の利く楽器の方が、子供に合致するのだと云う論が多くなつて來た。

日本で一概に定められぬものがある。

(一) 子供の宗教教育は、実に難しい。西洋に於いては、皆キリスト教の信仰の下に生活しているから、此に向ける為の教育をするには楽であるが、日本ではそうはいかない。種類が多過ぎる。

家庭教育に於いて、宗教的要素を欠いてはならぬ。

公立幼稚園では、或る宗教に傾く事は許されていない。

私立の幼稚園では自由である。が、家庭教育を補うのが目的故、各子供にやつてやるのが本当であらう。

神社を尊敬すると云う事は、今述べた宗教とは又別なものである。人類は大体に於いて人の尊敬するものは、自分も尊敬するものである。その人が払っている敬意に尊敬して敬意を抱くと云う事が常識である。

(二) 音楽、日本程音楽の種類の多いのではない。

音楽教育という事になると、難しい。

子供の耳へは種々なものが來ている。

## 五、遊戲

音楽も歌わせるのでなく、歌い度い心を満してやる。遊戲も表現し度い氣持ちを本体としてしているのである。幼稚園に於ける遊戲は、踊り度い氣持を満たしてやる。

その氣持とは、

あのびちびちした筋肉の、縮まっていずに、いろいろと伸びたいのである。その伸び度い氣持を存分に満たしてやる。

1、之によって子供は、運動感覺の快感を覚える。之は全然主觀的なものである。感覺は全然主觀的、自分の内部の問題である。のみならず、外のものを見、聞き、味わう。

殊に目の感覺は、受け取ると云う直接感覺よりも、外に出され形づけられて、又見ると云う、即ち客觀的に化する事が難しい觀念になる。

そこで遊戯と云うものこそ、主観芸術で自分の内部で楽しんでいるのである。内部芸術である。

そこで子供をして主観的運動快感を味わせる事が遊戯の第一義である。

日本の舞踊等、実に体を殺してしまっている。子供は又、あらゆる事にリズムをとる。事が進むに自然に起こる事である。

2、リズムを直接に感じる為には、リズムミック音楽をする。リズムの要求において、遊戯をする。

3、表現せずにいられぬ気持ち。

これ等は身体で行われるから、そこに体操的效果がある。即ち精神的内部に効果がある。

遊戯は自分の心の中に興奮を覚えすが、リズム表現ともなれば、共同遊戯の要がある。が、幼稚園の遊戯は見せる為のものでない。

併し、二つの問題に於いて見せる事が許される。

(1) 見せ様とすれば邪道だが、見て呉れている事は気強い。

(2) 人間は出来るなら、人を楽しませる事を悦ぶのは良い事である。(エンターテイメント)

幼稚園の遊戯は、自然的であり度い。芸術に勝ちすぎずに、子供の遊戯と云う事を本体とし、巧みか否かは問題でない。

——以上 昭和十年三月五日 終了——

(川村短期大学)

訂正

一月号 41頁上段12行「Gave」は「Gabe」

二月号 17頁下段4行「保育法の則」は「保育法原則」

三月号 21頁下段7行「之供に」は「これ共に」

26頁下段6行「Cave」は「Gabe」

” 12行「…ある。(第四恩物)が…」は「…ある

る(第四恩物)。が、…」

四月号 22頁下段16行「来たか。」は「来たが、」

27頁下段18行「即いて」は「即して」

## 大地にふれる

真壁 伍郎

春先、庭や畑につもった雪がだんだんとけていくのはとても心はずむものです。そこで子どもたちとこんな話になりました。大雪だった何年か前のことです。

「雪ってどっちからとけていくんだろかね。上のほうからなんだろうか。それとも下のほう」  
長い冬のあとの太陽のぬくもりがうれしく感じられるころでした。

「下からとけるよ」

子どもたちの答えは、そろってこうでした。

「でも、お日さまがとかしているんじゃないの」

太陽のまぶしいような明るさと暖かさを感じれば感じるほど、太陽の光があたっている上のほうから、雪はとけているといいたくなります。それでも子どもたちは、下からを主張します。

わたしの幼いころもそうでした。春が近くなると、雪は大地に接した下のほうからとけて、つもった雪の下で、ちよろちよろ小さな水の流れをつくっていました。そして、つもった雪を取り除けてみ



れば、そこにはもう春の草が緑の顔をのぞかせています。まぎれもない春がそこにありました。

説明はどうあれ、雪は下からとけてゆき、春は湿った大地の底からやって来る。雪どけの流れる水の音を聞きながら、わたしはこれを実感していました。その水は、地下の深いところに通じてもいました。この思いは、いまの子どもたちも変わらないようです。

大地は生きていて、そこからのちを産みだし育てている。恐らく、土くれに息を吹き込まれているのある存在となったわたしたちは、母である大地の呼びかけに、無意識のうちに応じようとしているのかもしれない。

こんなことがありました。初めて鉱石ラジオを作った小学生の弟が、アースが必要だということで、空缶に土をつめて部屋にもっていき、それに線を埋めこんでいました。ばかだなあ、それはだめだよ、と、弟にいったものの、このときの一件は、いまでもわたしの心に残っています。

皆さんは、どうお考えでしょうか。空缶程度だからだめなのか。ビルくらいの大きさの入れ物に土を入れたら、それでアースになるのか。

答えはどれもだめなのです。地球という大地に接していなければ、アースの役割は果たせません。では、バケツに盛った土と、地球という塊の違いは何か。それはどうも、子どもたちが実感している地球の大地としてのぬくもりと、わたしたちがこの大地から生れ、その上で生かされているという、ごくあたりまえの、それでいてとても意味深長な事実とその答えがあるようです。

わたしたちは、大地に接していると身も心もくつろぎ、安心できるといいます。泥まみれになってけっこう喜んでいる子どもの姿は、人間本来の喜びの姿なのでしょう。大地と切り離され、高くのぼ

ろうとするだけの人間にストレスがたまるのは無理ありません。地球を自分の高さにもちあげることはできないのです。ならば、自分から大地に降り立ってみましょう。大地のぬくもりにふれてみれば、わたしたちにもアースが必要なことが、よくよく分かるはずです。

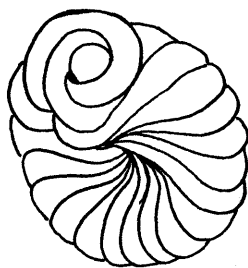
(新潟大学)

## 土いじり

——有田菊もみ修業に思う——

今井田 道子

目の前の作業台の上にドカンと置かれた土の塊り。「さあもんでごらんなさい。」促されるままにそっと手を添えたその土は、心地好く冷たく、柔らかかった。自分で作った白磁の茶碗に自分の好きな絵付けをしたい、そんな一念で遙々と有田の一陶芸作家の窯元に入れていただいた。八月の山峡の町は蒸して



いた。

土の塊りを手前に引き上げながら回転させる。片手で回し込むように押えつけ、もう一方の手で巻き上げる。手の位置を少しずらずらして同じ動作を繰返すと、菊の花びらのような形になっていく。

「菊もみ」と呼ばれるのはそのためで、荒練りの後で素地の空気を抜き、粘性を増すために行なうのである。

今しがた、ぜんまい仕掛けの玩具のようにリズムカルに回転していた同じ土が、にっちもさっちも動かない。力一杯押してみると左右にベタッと延びてしまう。あわててはみ出た土を畳み込むとクスッと笑い声が立つ。「それでは空気を入れている。」悪戦苦闘の菊もみ修業第一日目に、轆轤を使って至極薄手の茶碗を挽いて四季の野草の絵付けがしたい、という夢の途方も無さに初めて気付いた。

「そろそろ轆轤を挽いてごらんさい。」「いえくまだく結構です。」何回言ったことだろう。私は菊もみのとりこになっていた。体全体でバランスを取ればバカ力はいらない。菊の花びらがきれいな形で浮き出して、回転しては消えていく。フッと気を抜くと花びらの間隔が崩れてしまう。有田滞在は菊もみ三昧の日々で終った。

笠間の陶芸作家で月崇寺住職でもある松井康成氏は、日本独特の土をもむ方法である菊もみの長所は連続もみである点であると云う。いつ果てることもなく行を行おこなうことができる、その行という行おこないが人間を作ると説く。〈注(1)〉

子どもは泥んこ遊びが大好きだ。砂場の砂でおだんご作りをしたことがない子どもは、まずいい。一つ、二つと作っては砂場の縁に置き、それをくずしては又作る。「せっかく作ったのに」とか

「そろそろ別のものでも作ってみたら」等という周りの大人の思い等伝える余地も無い程にその行為に熱中している。

「土に触れていることが楽しくて。」陶芸を楽しむ素人が、老若男女を問わず異口同音に言うことだ。備前焼の第一人者、藤原啓氏は陶芸を始めた頃のことを「はたから見れば幼稚園児の粘土細工、泥んこ遊びのごときものだったろう。だが、幼児が時のたつのも忘れて土と戯れるように、私もたちまち土のとりこになった（注(2)）。」と回顧する。

結果ではなく行為自体が目的であるが為に土いじりは、大人も子どももとりこにしてしまうのではないだろうか。絵付けをした白磁茶碗はまだ存在しない。しかし菊もみ三昧の有田滞在中に土いじりの醍醐味を満喫したことで、その魅力の片鱗を味わうことが許された。そんな体験は、おだんご作りに打ち興じる子どもたちと共通の体験のように思えるのだ。いつ果てることもなく作り続ける子どもの姿に「その行い<sup>おこな</sup>が人間を作っている」ことを託し、とても大切にしていきたい。

注(1) 松井康成『無のかたち―やきものの心』講談社 昭55年 p.181～p.193

(2) 藤原啓『土のぬくもり』日本経済新聞社 昭58年 p.84

(聖心女子専門学校)

# 「土」——私の日曜農業——

近藤千恵子

「実りの秋の遠足には芋掘りがふさわしい」と、勝手に思いこんでいる私です。しかし、営業の芋畠では、蔓はすっかり取り除かれていて、これは本物の芋掘りではないと思うし、土の感触に興奮して走りまわる子ども達を叱って、やりきれない気持ちになりました。「そうだ。自分達でさつま芋を育ててみよう」と、迷いもせず日曜農業をめざしたのは、私自身、土いじりが大好きだからです。パンジー、サルビア、葉鶏頭などの種子を蒔いてから花壇を彩るまでの楽しみは、保育と似たようでもありますし、反対に、今年失敗しても、来年を楽しみにすればよいという気楽さが嬉しいのです。広い空の下で風を聴き、無心になれる農業の喜びが、私を畠作りにかき立てていました。

## 美しい土

丸い熊手のような耘運機の爪が、回転を繰り返しながら進むと、土の中から新しい美しい土が顔をみせてきます。三月の風の冷たさが、まだ本当の春を納得させない頃、耕した土ははっきりと暖かく、耘運機を押しながら、土の中に生まれた春を感じることができます。暑い季節には、耕した土の冷たさが快くて、畠仕事の喜びは、手しおにかけた土と素足で触れることから始まるのだと言えま

す。その上、どこから見ているのでしょうか、小鳥たちが降りてきて、忙しそうに土の中から出た虫を啄<sup>つば</sup>んでは飛び去っていく様子にみとれるのも、土を耕した後の小休止の楽しみです。

### 母なる土

耕した土に鍬<sup>くわ</sup>で畝<sup>うね</sup>をたててから、種子を蒔いたり苗を植えたりするのは、収穫を想像して胸のときめく仕事です。さつま芋の苗は根をもっていないものですから、五月の陽ざしの中で土にさすと間もなく、ぐったりと萎<sup>しお</sup>れてしまいます。花を育てる時であれば、じょうろでたっぷりの水をかけてあげるでしょうが、広い畠にそんな作業は通じません。自然の雨を待つしかないといひらきなおって、次の週末に来てみますと、芋苗は畝の上にびんと立っているではありませんか。無残に枯れているのは、畠に入った犬や猫が土から出してしまったもので、土の中に抱かれていた苗は、もう小さい根を伸ばして生き始めています。母なる大地を感じる時です。

六月、七月の高温と多湿の中で、芋苗よりもぐんぐんと伸びる草のたくましさは、「雑草の如く育て」の意味を再認識させてくれます。ようやく八月の半頃、芋蔓<sup>いもづる</sup>は畠の土をみえない程に覆って繁り、私達を草取りから解放してくれました。

### 遊ぶ土

待望の芋掘り遠足には、収穫することの他にたくさん体験がありました。畠の隅に芋蔓の大きな山ができる程、子ども達は畠の中を行ったり来たりして蔓運びをしました。一本のお芋も掘らないで

# “土の匂い”を

飯島 俊勝

虫捕りに夢中だった子ども、芋掘りを忘れて蟻の家を作った子ども、土をみて遊ばずにいらなかった子ども達の姿は、芋掘りにこだわろうとする私の気持ちを越えていたように思います。そして、どの子どもも、自分のリュックの中のお芋に愛着をもって家路につきました。

子どもたちに励まされ、土に魅せられて、私の日曜農業は続きそうです。

(まんとみ幼稚園)

春の慈光の中に芽ぶく草花は、大地を割って顔をのぞかせる。子ども達と、昨秋、土づくりから始めて一緒に植えた、チューリップ、ヒヤシンス、クロッカス等である。草花に、新たな生命を与えた大地の地表は、雪、霜柱でズタズタにされているが、指先で、表面の土を少し除けてみると、黒々とした、冬の厳しさを吸収し、じつくりと力を蓄えた“土の匂い”があ



る。

「土の匂い」を知っている……。

こんな言葉を子ども達に投げかけたくなる春の匂いである。

土ほこりの匂い、粉塵の顔をそむけなくなる匂いばかり。本当の「土の匂い」を知っている子ども達はいるのだろうか。アスファルトジャングルと言われて久しいが、都会だけでなく、開発と言う名の基に、その浸蝕は拡がっている。

私の園は、昨年、今まで寺院境内地を借用していたが、創立三十五周年を迎え、社会福祉法人の承認を受けて、隣地に新園舎を建て移った。当然のことながら庭も新しい。テニスコートにしても良いほどの土を入れてもらった。アスファルトに近いほどに堅く、平らな庭で、スクーター、サッカー、縄飛びには、非常に都合が良い。

しかし、新しい庭になって、子ども達のおそびに変化がおきたのである。それは、一つの「おそび」が子ども達の間で行なわれなくなってしまったのである。園に代々伝わっていた「かたまり」づくりが消えてしまったのである。

「かたまり」とは、土で作った「だんご」である。けれども、子ども達は、だんごと呼ばずに「かたまり」と云う。「かたまり」は多少の違いはあるが、二種類ある。一つは、泥のだんごで、もう一つは、ビンの栓等の用器の中に、細かな砂をいれつくるものである。

「かたまり」は、園庭の細かい砂を、子ども達が考えだしたいくつかの方法で集め、それと水とで作るのである。微細な砂集めから「かたまり」を作るまでの作業は、驚きの連続である。子供達の砂



集めの作業を見てみると、本当に良く思いついたな！、なるほど、理に叶っている。と、感心せずにはいられない。

①地面の荒い砂を除け、その下の堅い土を、手のひらで叩いて細かい砂を集める。

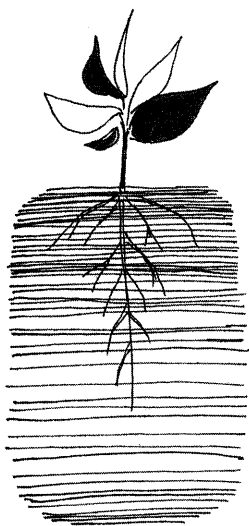
②滑り台の上から砂を流し、滑り台の上部板に付着した砂を集める。

③浮動木に土を乗せ、力一杯こぎ最後に残った砂を集める。

まだまだあるが、子どもの智慧には脱帽である。

新しい園舎となり、大人は、何もかも快適で子ども達の保育に対しても、良い環境が整った、これでよし、と思いがちであった。境内の多くの木々が茂った、変形した土の庭が、子ども達に、無言のうちに多くの事を教えてくれたことに「かたまり」事件は教えてくれた。

「土の匂い」「季節の匂い」「自然の匂い」のある庭をもう一度。子どもの心、かえってこい。「かたまり」を又、作ろう！！



(信州上田 芙蓉保育園)

# 土 生き物としての土

清水 永一

土なんかなくてもトマトが作れると思っている人が多い。土を否定する考え方が一部にはあります。筑波で開かれた科学博では水耕栽培のトマトが何個なるかということが話題になりました。確かに、トマトにとって理想的な環境を人工的にでも作ってやれば万単位の実を付けます。現在の科学技術では簡単なことです。

この人工的な環境というのはどうなっているのでしょうか。土の代わりに水が使われます。水といってもただの水ではなく、化学肥料や農薬まがいのものを溶かしこんだ生暖かい（化学反応を高めたリトマトの成長を早めるため）液体です。太陽の代わりにあの悪魔的な原子力発電所で作られた電力を大量に浪費する人工光ランプを使い石油も大量に消費する温室です。

このような環境で作られたトマトはもはや食べ物とはいえず工業製品そのものです。この工業製品「トマト」が一部市場にでまわっていて、これからどんどん増えそうです。

土は生きています。土の中には、いろいろな動物や昆虫、微生物、細菌類が生きているひとつの生命系であって宇宙です。夏、トマト畑の敷き藁をはぐとクモ、ミミズ、てんとう虫、はさみ虫、ごみ虫、かげろうの仲間など名前も知らない生き物だらけです。たった1グラムの土の中に億単位の動

物や、昆虫微生物が住み、この多種多様な生き物が食べたり、食べられたりの食物連鎖の関係で土のなかに存在しています。豊かな土とはこれらの生き物の数が多くまた活発に活動しているということです。だから、農薬や、化学肥料の多用は、土のなかに生きているこれらの生き物を殺し、死んだ「土」にしてしまうのです。

トマトの害虫にアブラムシがいます。トマトの柔らかい芽、葉、実などの汁液を吸って枯らしたり、タバコモザイクウイルスとか、キュウリモザイクウイルスの菌をばらまき、葉、芽、実等をちぢれさせてしまいます。収穫量は激減します。この時期は殺虫剤を使うべきかどうか常に悩まされます。もし使えばトマトも枯れたり、実がおかしくなったりしないのは明らかで、ただでさえ厳しい農業経営が好転するでしょう。一度の殺虫剤の散布でもかなりの効果があるのは知っていますが、毎年のように使わずに被害を大きくしてしまうのです。

殺虫剤を使うことは、アブラムシの天敵であるクモ類、てんとうむし、くさかげろう等も殺します。これらの肉食昆虫は、野菜にとつての害虫を食べてくれるので、自然と被害の広がりを食い止めてくれます。だから、何年にもわたって畑の生態系のバランスの維持を目指して除草剤も使わずにきました。天敵も確実に増えてきています。

農薬を使うことはこれら天敵を殺し、土の中にも農薬を残すことにもなるのです。土の中に入れたものは、土の中に残るか、野菜が吸い上げるか、空気のなかに放出されるか、雨水と一緒に川に流れ込むかしかないのです。

土を死に至らせる事は、水、空気、緑といった生活環境をも破壊する危険性があります。

あらゆる生き物を生かすような農業でなければ食べ物を育てる人間、食べる人間も生命力を維持する食べ物の恵みにあずかれないでしょう。汚れ無き土に種を蒔け。無農業を目指す野菜作りを十数年つづけてえた結論です。

(清水農園)

## 堅い土、柔らかい土

豊田 一秀

(1)

三月の中旬、あまにがい風が吹くようになると、外遊びの子ども達の肩から力がぬけてくるようだ。そして地面にゆったりと座って遊ぶ姿が多く見られるようになってくる。

丁度そのような頃、この遊びは発明された。靴のドロ落とし用マットの網目から、固まった土を一つ一つ、子ども達はぬき出している。一つの穴から指を入れ、隣りの穴の下から、指をそっと押し上げると、スポッとかたまりがもち上がってくる。そして、子ども達は大事そうに収穫物をコップや升に集めている。スポッとぬけるところや、同じ型のものが集まってくることがこたえられないといっ



た感じた。子ども達は集めた数を競ったり、所有を主張したりはしない。集中しているが、興奮してはいない静かな緊張がある。

この靴ふきマットの土は、冬の間中踏み固められ続けたものである。霜どけの路、雪どけの路、高下駄のようになってしまった、靴の裏のあの気持ち悪さ。

私は、もっと簡単にそれを作るのでは、と思い、湿らせた土をマットに入れて、踏み固めた後、同じように



ぬき出してみるが、インスタントものは、その堅さとつやにおいて比べるべくもない。第一、柔らかくてうまくぬき出せない。やはり、時をかけて少しずつ重ねられた天然ものでないとダメなのだ。

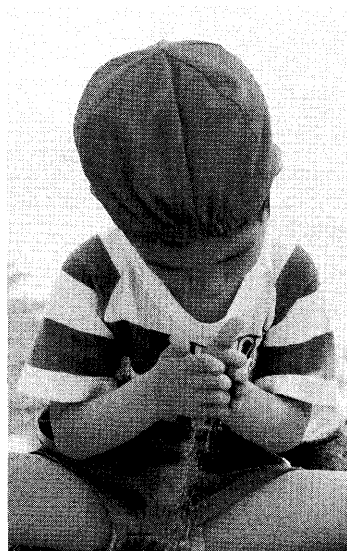
子ども達は温かな土に座って、冬の土をぬき出している。

大切な収穫物は、共有の宝物として秘密のU字溝に貯えられていた。

(2)

五月初旬、子ども達の半袖が青葉に映えてまぶしい。K君は、木陰に足を大きく開いて腰を下ろす。そして、両手を同じように動かして腰を下ろす。そして、両手を同じように動かして、白く乾いた土を自分の近くに集め、小さな山を作っている。両足の間の地面には、手の動いた跡がハート型となっていて残っている。

K君は、できた小山を両手ではさみ取るようにして、陽に暖められた柔らかな土を手にする。そして、合わされた手を少しずつ開いては、手の間から土を落としている。柔らかな土は砂時計のように、糸を引いて元の山に落ちている。K君は、手になくなる度に、何度もそれをくり返している。合わされた手は、はたから見ると拜んでいるようにも見える。



K君の世界をこわしてはいけない、と思いつつも、私は強く心を動かされ、K君の横で同じように、両手で砂時計を作ってみる。両手の間から、サラサラと流れおちる柔らかい土。両手の中で土が減っていく感じが、何とも言えず頼りなく、また心地よい。この快感は排泄の心地よさに似ているなと、フッと考える。

K君は、両手の、特に小指辺りの開き具合を加減して、砂の落ちる量、速さを調節している。私は、K君の落とすサラサラ土を自分の両手で受けてみる。K君の土が私の両手にたまったので、今度は、私がK君の手の上に土を流し落とす。K君は、両手でそれを受けてくれる。こうして、土は流れ落ちつつ、二人の間を循環する。

K君は三歳になるが、まだ言葉は出ない。しかし、柔らかな土のおかげで、よい会話のできたひと時であった。

カチカチの土、サラサラの土、ベトベトの土、ホクホクの土、土は様々にその態を変える。子ども達は、その時々々の土の態に應えつつ、それぞれの土を遊びこなしていく。

(1)も(2)も豊かな土に囲まれた兵庫県社町の小さな保育園でのひとコマである。豊かな土は自然の恵みかもしれないが、園生活で与えられるゆったりとした時は、自然の恵みではない。それは保育者の配慮によって保障されるものである。子ども一人ひとりの心の「育ち時計」に合った時を尊重したいものである。

時は五月、子ども達をたっぷり、そしてゆったりと外で遊ばせたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# 「土」——野菜を育ててきて——

石黒 逸子

私は、東京に生まれて、十七年前大学卒業と同時に、イスラエルのキブツ（農業生活共同体）に一年間研修に出かけました。そこで初めて農業体験をし、「土」に触れました。イスラエルの自然は厳しくて、イリゲーション（灌漑）をして、荒地に作物を栽培します。人間の力で水を撒かなければ成り立たない農業でしたが、そんな中で果樹を植え、野菜を育て、動物を飼う人々の生活に融れて、すっかり農業に魅せられてしまいました。「土」に生きる厳しさ、暖かさ、優しさを肌で感じました。

数年後、研修で知り合った夫と結婚し、長男の誕生を機に、茨城県大宮町の知人の養鶏場に移り住んで、十二年になります。

夫の仕事を手伝いながら、農場の近くの空地进行を少しずつ開墾して、野菜を作ってきました。鶏ふんを利用して、畑を耕しています。

毎年二月になると、温床に夏野菜の種を蒔き、ビニールでおおいます。その一





粒、一粒が、いまだ弱い日ざしの中、「新しいいのち」をゆっくり土の中からのぞかせます。双葉が出、続いて本葉が出て、ゆっくりゆっくり育っていきます。太陽と水と土が野菜を育てていきます。

四月になると、あたりの草木が息づいてきます。うぐいすも鳴き初め、私の心も体も躍り始めます。もう、じっとしてはいられなくなります。今まで、ビニールで囲われていた野菜の苗を、寒さに強い順に、畑に降ろしてやります。苗が畑に根を張り出すと、毎日のように伸びるのがわかります。

また、その頃には、野菜に負けじと、全ての草もぐんぐん伸びてきます。子供たちと一緒に畑に連れ出し、草を取り、間引をし、支柱を立て、土寄せをして、夏の収穫を待ちます。

子供たちも、土に触れ、野菜や草の息吹きを感じ、働いて汗を流して、みんなでできた野菜を味わいます。とれたての野菜は、いうまでもなく、みずみずしくおいしいものです。

現在は、「食べ物」が単なる「もの」のような扱いをされ、「食べ物」が「いのち」あるものだったことが、見えにくくなっているようです。「土」はいのちを育てます。野菜や草を育て、そして動物を育てます。それを、私達が食するのです。また、私達が、動物たちのふんや、木の葉や野菜や草の余りを土に返します。いのちが循環しています。

また、動物を飼っていると、いのちの営みにも出会えます。鶏が卵を生む瞬間を見たり、山羊のお産を目のあたりにすることもあります。お産の瞬間には、同じ子を生むものとして、思わず共感したものでした。

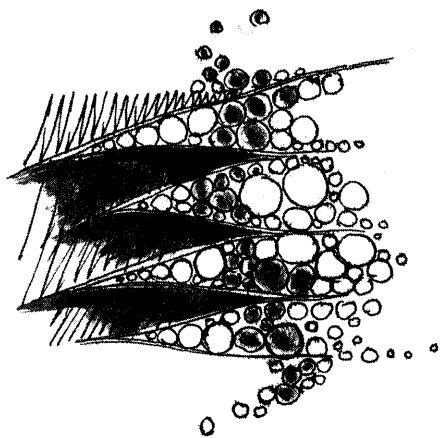
これからも、「土」に触れながら、太陽や風や雨や草木につつまれて、暑いな、寒いなと肌で季節を感じながら、ゆったりと自然の中で暮らし続けたいと思っています。

(奥村ファーム)

子どもにとって楽しい

## 音楽リズムのあり方を考える(1)

原口 純子



はじめに

昭和五十年頃よりそれまでの六領域を中心とした指導観から保育の流れは大きく変わり、子どもの自主性や主体性を重んじる方向に重点が置かれるようになった。自由な活動を重んじる倉橋惣三の保育観が再評価され、自己充実が大切である事、遊びの充実こそ幼児の心身の発達にとって最も望ましいこととして指導されるようになった。

った。以降約十年の中で、子どもが自主的に遊ぶことの大切さの認識、そのための教師のあり方、環境・整備の重視、ままごとやその他のごっこ遊びの大切さ、仲間づくりを中心とした学級経営などが強調されるようになった。

これらの事柄は理論上大へん好ましいことであるが、現実を見た場合この指導と方向づけの中で、子どもたちははたしてしっかりとした成長を保障されているだろうか。あるクラスの子どもたちは伸び伸びとした生活の中でしっかりとした仲間関係を作り、歌や劇や運動、製作においても持てる力を十分に伸ばし、力をつけて修了しているが、又別なクラスでは、子どもの集団も育たず、逆に以前であれば決まって与えられていた活動すらなくなり、伸び伸び、又は自主的の名のもとに、いっそう貧弱な保育内容と生活経験しか持てずに修了しているということもありうるのである。

子どもひとり一人が幼稚園に来て何を経験して一日を過しているかという、教師が与えたつもりの経験ではな

く、子どもが持った経験『実質体験』（注1）への視点  
は今日一層強調されなければならない。子どもを自主選  
択活動（遊び）の中で育てる保育観の上に立ち、教師自  
身が様々な活動について確かな知識と技術とを再確認し  
なければならぬ。歌を子どもが楽しむにはどう指導す  
れば良いか、豊かな絵画表現を育てるにはどう指導す  
れば良いか、仲間関係を育てるごっこ遊びの環境づくりな  
どなど、一つ一つに教師が自信と確信が持てれば、個々  
の幼児の活動に対して的確な援助をすることができ、ひ  
いては豊かな幼児期を経験させることができよう。

「遊びが大切」「遊びを通して育てよう」という言葉の  
中で、具体的な活動の内容がいまいになつてしまつて  
いることはないだろうか。これらの認識に基づき、本園  
では年間研修テーマに「音楽リズム」をとりあげた。

## 目次

### I 主題について

### II 研究方法

### III 研究内容

#### 0. 活動の洗いあげ一覧

1. 歌唱 種類と傾向、事例と考察、歌の指導方法
2. 楽器 種類と傾向、事例と考察、指導方法
3. わらべうた 種類と傾向、事例と考察
4. 手あそび 種類と傾向、事例と考察
5. 踊り・フォークダンス等 種類と傾向、事例と考察

#### 察

#### 6. 総合活動としての野外劇

#### 7. 劇あそび・オペレッタ

### IV まとめ

#### I 主題について

「子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える」

文部省の幼稚園教育要領（昭39告示）によると、領域音楽リズムに属するねらいとして

1. のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の

喜びを味わう（歌唱、楽器）

2. のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう（動きのリズム）

3. 音楽に親しみ、聞くことに興味を持つ（鑑賞）

4. 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどに表現する（創作）

の4つの柱が立てられ、これらには26の小項目が含まれている。又教材の選択や指導に当たっては「生活の中にとけこませて、総合的な取り扱いをすることが大切である。（注2）」と述べている。

子どもが本心に心から歌やリズム表現を楽しむというのはどういう状況であろうか。子どもは本来男児も女児も歌うことも踊ることも大好きである。けれども保育の中で子どもたちは一方的教師に歌わされたり踊らされたりしていることはないであろうか。

ボール遊びやままごと、製作活動が比較的子どもの選択活動として自主的に取り組まれているのに対して、歌や楽器、リズム表現は教師主導型の一斉課題活動として

残っている活動であり、生活にとけ込ませて、総合活動  
となりにくい、言いかえれば生活化されにくい分野であ  
る。

与えられたものとしてではなく、子どもが自ら楽しむ  
音楽リズムの指導はどのようにあったらよいか、実践を  
通して考えてみようとするものである。

## II 研究方法

### 1. 活動の洗いあげ

園の中で日常的におこなわれている音楽リズ  
ムに属するものを、歌唱、楽器、わらべうた、  
手あそび、動きのリズムについて学年ごとに月  
を単位に洗いあげる 4月～12月

### 2. 実践記録をとる

上記の活動について

○一斉指導場面、自主活動場面での指導例  
○生活の中で自発的に歌ったりおどったりして  
いる活動場面、などについて自由記述方法によ

り記録をとる。

○野外劇及び生活発表会の劇遊びについて記録  
をとる

### 3. 研究保育

12月2日、県指導主事白井洋子先生を迎え研  
究保育を行った。

### 4. 創作、実技研修

リトミック、手あそび、野外劇の創作など実  
技の園内研修

## III 研究内容

### 0 活動の洗いあげ

音楽リズム実施内容（次回掲載）

### 1 歌唱

#### (1) 種類と傾向

○季節の歌（チューリップ、チョウチョ、かたつ  
むり、とんぼのめがね、どんぐり）  
○行事の歌（誕生日の歌、七夕の歌、おかあさん

の歌、サンタクロースの歌)

○たのしい歌(ガンバリマンの歌、むすんでひらいて、友達讃歌、うたえバンバン)

○しつけの歌(歯をみがきましょ、お返事ハイ、バスっていいな)

○テレビマンガの歌(ペガサス、キャンディーキヤンディー、ぼんずしょうゆ)

## 考察

ア 季節の歌や行事の歌が多いのは、幼児の生活から見て当然とも言える。身辺の季節の移り変わり、季節の行事、身のまわりの動植物の歌は子どもの生活そのものと言える。従ってかなり古い歌でも伝統的に歌いつがれているものが多い。

しかし歌詞やリズムが古くなり今の生活感に合わないものは、しだいに歌われなくなっている(きくの花、たき火)。これらの歌に代わって、季節や行事に関係なく明るく、軽快で歌詞

のおもしろいものが多くとりあげられるようになってきている(ホ・ホ・ホ、ガンバリマンのうた、友達讃歌、小さな世界)。歌詞では、ホ・ホ・ホ、とかエイエイオー、5、4、3、2、1、発射!! などかけ声の入った歌が好まれている。

一方しつけの歌は、かつては幼稚園の歌の中でかなりの量をしめていたが(歯をみがきましょ、おへんじハイ、お片付け)、保育形態の変化、保育観の変遷に伴い、朝の集会などもなくなり、歌をしつけの道具として使わない方向に変わって来ている。

イ 幼稚園で歌われる歌が大きく変わって来たのには、昭和五十年代初に早川史郎氏が「現代子どもの歌一〇〇〇曲シリーズ」を出版したことにより、現代感覚で子どもの生活に密着した歌が、やさしい伴奏で紹介されたことによるところが大きい。

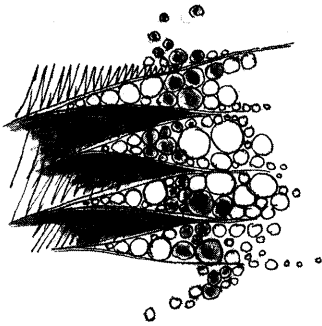
一方テレビマンガやテレビCMの影響もあり、ペガサスやキャンディーキャンディーは、レコードをかけ踊っているうちに自然におぼえて口ずさんでいることが多い。

ウ 4月5月など入園当初に、むすんでひらいて、チューリップ、手をたたきましょ、など手あ

そびと一体になった動作を伴った歌が多いのは、子どもにとつてただ口で歌うだけよりも動作と一体になった方が心地よく歌いやすいため、おのずからそれらの選曲がなされているものと思われる。言いかえるならば、未分化性の強い幼児期は、歌を体中で歌っていると言えよう。

(注1) 「園生活における幼児の実質体験を探る」 昭和五十五年 吾妻幼稚園 原口他七名

(注2) 「文部省指導書 音楽リズム編」 P.3 文部省



——つづく——

(つくば市立城南幼稚園)

\*\*\* イメージ画にみる母子関係 その1 \*\*\*

ささえる母ともたれる私

やまだようこ

1 母子関係を絵にすると

もし目の前に一枚の白紙を渡されて「幼いときのあなたとお母さんとの関係をイメージして自由に絵に描いてください。」と問いかけられたなら、あなたはどんな絵を描くだろう。

こんな問いを実際に大学生にしてみると、みな最初は「エー」「イヤー」「絵なんてにがてョォー」「そんなの簡単には描けないウァー」としりごみするが、結構楽しそうに描いてくれる。それを共同研究しているアメリカやドイツや中国の心理学者に見せると、「絵は日本の学

生のほうがだんぜんうまい」と悔やしがるから、日本の学生がむだにマンガを読んでいるのではないことが証明されるばかりか、言葉で論理的に説明することががてな日本人も絵による表現には自信をもってよいらしい。

2 母子関係の網目 ネットワーク

人の心は実にさまざまなようでも、人が想いつく基本的なイメージには、あんがい共通した「かたち」がある。絵は、複雑でとらえどころのない「母子関係」のありようを、まるごと単純な一枚の構図に縮約してとらえ



## ネットワーク



● 私

▲

——イメージ画にみる日本文化の心理』  
有斐閣より

ることができるすぐれた意味記号である。

この研究は、母親像と自己像をひとまとめにして関係概念としてとらえるところに特徴がある。その基本の私たちはさらに、約千五百人の女子大学生の絵から、図1のように関係づけられ、網目モデルとしてまとめられた。そのうち「包む母と入れ子の私」のかたちは、日本文化の基本構図としても興味深いものだが、それについてはすでに著書『私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理』（有斐閣）で説明した。このシリーズではそれ以外のさまざまな母子関係の構図を眺めていくことにしたい。

ただし「どのような母子関係が良いか」という価値判断や教育評価からはできるだけ離れて見ていくことにする。人間関係には、こうすればよいという一律な公式はあてはまらない。長所と短所は裏表であり、同じ関係が「良く」も「悪く」も働くからである。母子関係には、それぞれ違ういろいろなかたちがあつてよいし、一人の人が多様な「母」の機能をもつこともできるのである。

これらの絵は、単なる母子関係の問題をはるかに超えて、原理的な二者関係「人と人とをむすぶかたち」を表わす意味記号として眺めることができるし、人が外界や他者とのような関係を結んで生きるのかを考える上にも役だつてであろう。（図1参照）

### 3 大地としての母——下から支える

最初に「ささえる母ともたれる私」の構図をとりあげてみよう。これは、母が私を「支えている」、そして私が母に「もたれている」「頼っている」「依存している」「くっついていいる」という関係が描かれた構図である。

母が私を支えるやりかたの一つは、図2の「親ガメの上の子ガメ」や「鏡もち」のように「下から支える」方法である。

ある学生は「大地としての母」を描いて次のように説明していた。「かわい花が一輪咲いていても大地からそれを支えていてくれる感じをあらわしたかった。母が怒れば、地震のようにユラユラと大地は揺れるが、激し

い雨があっても、しっかりと根を支えてくれるのである。小さい時、私は病気で長い間寝ていたので、余計守っていてくれるというイメージが強い。」

別の学生は「土台としての母」を描いて次のように説明していた。「茎、葉、根のいわば花の土台みたいになるものが母親で、根から養分を吸い取ってもらい、茎で

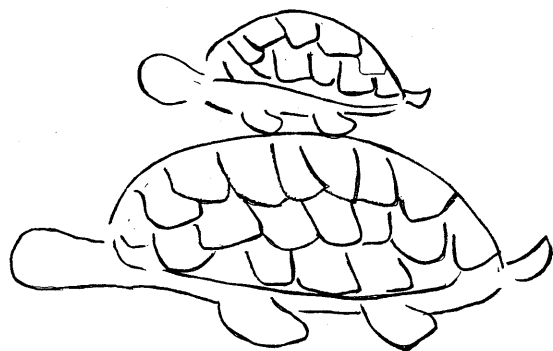


図2 親ガメの上の子ガメ



図3 傘となる母

送ってもらって咲く花が自分であるというイメージしました。幼いときは母親の手助けのもとに物事をかたづけしてきたのだと思います。幼いなりに自分でいろいろなことを考え、行動してきたとは思いますが、その一つ一つのしぐさ、行動、言語というのは母親が教えたものであり、教えられなくても自分で見てまねをしてきたものだ

と思います。母は自分より絶対に強い人、自分にとってなくてはならない人と思います。」

これらは文字どおりグラウンド（ground 大地、基礎、土台、背景）としての母の姿である。母は、子よりも圧倒的に大きく強く安定しているが、子を威圧するのではなく、「下積み」「縁の下の力持ち」「踏み台」「滋養の基」となって子の成長のために献身的にサポートする存在として描かれている。（図2・図3参照）

#### 4 傘となる母——上から支える

第2の母の姿は、図3の「傘となって風雨から守ってくれる母」や「屋根になる母」のように、私を「上から支える」母である。

これらの絵では、「小さいころ母は私を身体中でかばい育ててくれました」「母の大きな傘によって外界のいろいろな危険物をふせいでもらっていた私」「知らず知らずに見守っていてくれた母親、『母親』の存在を私自身自覚していないけれど、いつも大きなものが自分をと

りまいていたような気がする」などと説明されているように、自分より大きい母が我が身をもって子の成長にさざげるといふ点では「大地としての母」と同じである。しかし土台として「支える」というよりは、「かばう」「おおう」「包む」「守る」という機能のほうがより強められた姿である。

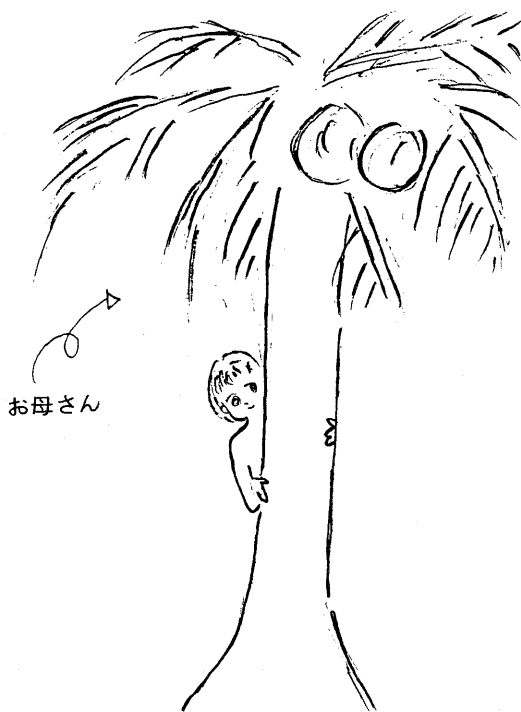
#### 5 盾となる母——前から支える

第3の母の姿は、図4の「木の後ろに隠れる私」や、「母のスカートの陰に隠れる私」「いじめっ子を追い払ってくれる母」のように、私を「前から支える」母である。

ある学生は、巣を襲う巨大なヘビに立ち向かって羽を広げて闘う親鳥としての母と、その後ろの巣の中で震えているヒナの絵を描き、「親は命をかけて子を守る」と説明していた。前から支える母は、子を後ろに隠し敵や外界を前面で防ぐ盾となる母である。

「母に背負われる私」の絵もよく見られた。これは

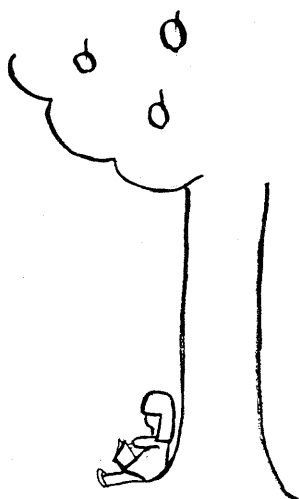
「前から支える母」も「下から支える母」の折衷形でもあり、親ガメの上の子ガメのように母の背中にのって運ばれる自分と、いざという時には母の後ろに隠れて安心



頼っていた

▲図4 木(母)の後に隠れる私

していられる自分の姿である。  
日本の伝統的な「おんぶ」は、抱く姿勢に比べると、母の手足の自由や行動力が確保されやすく、母と子が同



いれば安心できた

◀図5 木(母)にもたれる私

じ方向を向いて行動を共にしやすいこと、母が前面に出て「盾」の機能をもちやすいこと、しかも母にぴったりと全身がくっつきやすいことなどから、子どもには「大船」にのったみたいで安心できる心地よさがある。(図4・図5参照)

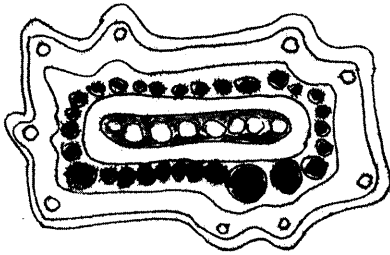
#### 5 後ろだてとなる母——後ろから支える

第4の母の姿は、図5の「大木にもたれる私」のように「後ろから支える」母である。これは、子どもが安心してもたれたり頼ることができる、依りかかりの支柱や

パトロンとしての母、あるいはバックグラウンドとしての母である。

以上のように支えかたは微妙にちがうものの、いずれも「ささえる母ともたれる私」にあてはまる母子関係のかたちについて概観してみた。この次には、これが他のかたちとどのように関係しむすばれていくのかといふところへ考えをすすめていきたい。

(愛知淑徳大学)





ですが、子どもの方は、そのような事柄をまるごとバネにして、あるいは自然に備わった力で、不可能を可能にしながら、どんどん成長していく姿に接していると、あたかも、親の拙なさや、無力さへの「許し」とでも言えるようなものを、身をもって示されているように感じます。あらためて、子どもは天からの授かりもの、預りものという考え方に、深く納得するところでもあります。

#### 一、スプーンとの関わり

満八か月頃から、フォークにつき刺したじゃが芋やトマトを、握って食べていたが、九か月になって、自分でつき刺して食べようとするようになった。スプーンについては、フォークほどそれを大人が使っているのを見る回数は頻繁ではないのに、手をのばして持ちたがる。みそ汁や煮物の中に入れて、食物がたいして付着しないのに、一滴か二滴の汁をしゃぶっては満足している。もちろん握りばしと同じで、小指の方からくぼみが出ているので、水平の状態で口まで運ぶことはなく、必ず口の前

でくぼみは上下がひっくり返っている。

育児書でみつけた方法で「母子同じ方向にむかい、スプーンを持った母の手の小指を子どもに握らせて口に運ぶ」というのを試みたが、自分で食べるという感覚から離れてしまったためか、スプーンは、いつもみごとに奪い返されてしまった。どのように教えたらスプーンが使えるようになるものか、私は考えるのが面倒になってしまった。それで、ポタージュやヨーグルトなど、スプーンに付着しやすい食べ物で使わせてやるようにしたら、相変わらず、くぼみに液体は入らなかったが、スプーンをしゃぶり回しながら自分で時間をかけて食べ、精神的な満足は満たされている様子だった。たまに半固形のゼリーやカスタードプリンを与えると、数度に一度、スプーンで口まで運べることもあり、あとは手でひろって食べて、大変に満足している。一歳三か月をすぎた頃、牛乳やお茶をスプーンですくって飲むようになるってしまった。親としては、行儀の悪いことだからやって欲しくない事である。けれども、もし、この機会を逃した



らスプーンの上達に意欲がもてない子どもになってしま  
うのでは……とも考えた。そこで、意図的に飲み物を無  
駄にするのでなければ、やりたいだけさせてみることに  
覚悟を決めた。砂場の砂や水でさせればよい事と、割り  
切って考えなければならぬ事だったかもしれない。し  
かし、*「うそっこ」*の世界の砂場と、実際に口に運ぶ飲  
み物に対してでは、真剣味が違ってくるのでは……など  
とも思った。子どもに甘い親の単なる言い訳かもしれな  
いとも思った。

満二歳になった今、スプーン、フォークとも、ほとん  
ど大人とかわらない程自由自在に使いこなしている。危  
険のないようにと、乳児用のポリエチレンのフォークは  
先が鋭くないのだけれども、フォークとしての使用価値  
はないと、私は思った。先の鋭い金属のフォークを使わ  
せていかないと、つきさして食べるというような使い方  
はいままでたつてもできない。先のあまいフォークは、  
ラーメンやそばを食べる時だけ使用価値があった。ゼリ  
ーやブディングをすくう時にも金属製のうすいスプーン

の方が、使いやすいと私は思う。又、さかのぼって、離  
乳食を与え始めるころに使うスプーンは、ティースプー  
ンのようなくぼみの物でなく、アイスクリーム用の平た  
い物の方が、すっきりと食べ心地がよいように思えた。

## 二、クレヨン、サインペンとの関わり

祐子が、最初に手に持って書こうとしたのは、鉛筆だ  
った。丁度、満一歳の頃のことである。大人が日常使っ  
ているボールペンや鉛筆をまねて使ってみたかったのだ  
ろうと思う。多色の方が楽しさがひろがると思い、色鉛  
筆を持たせてみたが、鉛筆ほど鮮明に線が出ないし、書  
き味も重くてあまり快くない様子で、普通の鉛筆でばか  
り書きたがった。色鉛筆は箱に出し入れするきれいなお  
もちゃになってしまった。

クレヨンの方が、書き味が軟らかいだろうと思い、与  
えたが、やはり書くよりも、おもちゃ箱や他の入れ物に  
出し入れすることを楽しむ様子であった。このような使  
い方には、私は感覚的にみずぐす気になれず、すぐにか

くして、存在を忘れさせてしまった。

次に、カラーサインペンを出してみた。色は鮮明で、書き味は軽く、鉛筆に勝る楽しさを味わわせられるはずであった。一歳二か月の祐子は、サインペンのきれいなふたを次々とはずすことに興味が集中し、書く道具として使うところまでいかない。描く道具は、鉛筆一本で充分、としばらく思うことにした。

一歳八か月ごろになって、鉛筆でのなぐり書きも、腕を使ってぐるぐると輪がかかるようになってきた。見ている私の方が更なる刺激が欲しくなり、又、クレヨンを出してみた。クレヨンを使ってぐるぐると楽しく描けるようになったが、紙をむいたり、クレヨンを折ることに興味を持ち、物を大切にに使わせたいと考える親側の要求とはますます入れ合わなくなり、又してもクレヨンはとり上げ、かくしてしまった。

カラーサインペンについては、軽い書き味と鮮やかな色味が、ますます自由に書きなぐる楽しみを増幅した様子で、緩急、大小、描く曲線も複雑に、色どり豊かにな

ってきた。前回の試行錯誤のかがあって、かきおわったら、自分でキャップをはめておくことが自然に身についてしまったようだ。これは想像以上に楽しいことで、親子ともに、余計なことに神経を散らさずに描くことを楽しめるのは二倍の喜びだったように思う。

一歳で線がきを始めて、二歳直前でもまだあきずに直線、曲線、円、などをかいて楽しんでいた。その楽しみにエネルギーの衰える様子もないので、やりたいだけやらせてみたいと考え、ことばかけの方は、「きれいな」「元氣にかけたね」程度の、描いた線についての共感にとどめていたのだが、たまたま、祐子の祖母が、「いっしょにかきましようねえ」と言いながら、祐子のかいた曲線を斜線でぬり分けて、「咲いた、咲いた、チューリップの：」と歌い出し、祐子の描いた曲線がきの絵は、たちまちチューリップに変身してしまったのである。

私はそれまで、祐子の目の前で、意味のある形を描いてみせることを避けてきでいる。「自由に線がかけて楽

しい」という今の楽しみ方に対して、「お母さんように形がかけない」とか「自分のイメージしたような形がかけない」というような高度な雑念で、今の充実をこわしてしまいたくなかったからである。

祐子はそれ以来、「咲いた、咲いた」と歌いながら、相かわらず曲線を描いているが、時々、「みかん！」とか、「ブーブー！」とか、それらしいものを命名することとも出てきた。それ以上には、私にとって新しい発見だったのは「一緒に書こう、一緒に書こう、」とせがまれて、一枚の紙の上で、祐子は相かわらずの曲線の遊び、私は新幹線や鳥をかいていても祐子は、「ポッポだね！」「シンカンセン！」と喜ぶだけで、自分のと比べて、どうかなどは全く思っていないらしいということだった。この経験のおかげで、私は少し自由になり、砂場でも、ままごと風の遊びをしている祐子のそばで、穴を掘ったり、トンネルをつくったり、ということが平気のできるようになった。よほど興味が高まってきた時でないといと、手を出しに來ないし、自分の関心事に没頭してい

るからである。祐子への信頼感がひとつ進歩したような気がする。

もとにもどるが、二歳一か月の今、線がきの楽しみから、自分のつくったものからイメージを生みだそうとして変わってきている現在を、いとも簡単にかけぬけていく様子をとらえることができて、楽しかった。できることならスカートの裾をつかまえて、「もっとゆっくり歩いて、お母さんによく見せてよ」と、言いたいぐらいだ。

二歳一か月の会話。「すてきなチューリップかけたね。葉っぱをつけてあげよう。」「ちがうよ。これ、チューリップでない！」もう少しすると、自分でイメージを持って描こうとするようになるのでしょうか。とにかく、今は、祐子が表現したものから受けるイメージを、こちらにも口に出して表現してみてもいいのだな、その許可のサインが「ちがうよ」という強いことばに表われたのではないか、と思えるのだ。

### 三、歯ブラシと風邪薬

前述したスプーンにしてもクレヨンにしても、祐子の心の動きや手指の器用さに合わせて、大した無理もなく生活の中に取り入れて来られたように思うが、歯ブラシと、とりわけ、風邪薬は、突然、生活の中に飛び込んで来た。歯ブラシについては、歌を歌いながら、あるいは親と交互に磨かせ合うなど、いやがる祐子を、無理に納得させて磨いてきた。ところが、満二歳で、流感に感染し、いやがるシロップ薬を無理に口に流し込んだ時から、飲み薬と歯ブラシに対して、全力での抵抗をしてくるようになった。いろんな手をつくしてみたが、口に含んで、薬ということがわかると、吐き出している。鼻をつまんで流しこむ以外に方法がないと思った。幸いすぐ熱は下がり、薬も四日ほどで終わったが、歯ブラシの方は今でも毎晩、親子で修羅場を演じている。食後の口すすぎの方だけは好んでするので、夜の歯みがきが充分でなくても、あまり深刻にならないようにしているが、このような苦しみを通りぬけてこそ、自分できちん

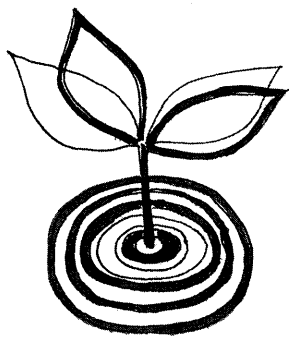
と磨けるようになった時の喜びは大きいであろうか。待ち遠しいと思う。

ふり返ってみて、このように、子どもとの対立を気にして問題視するような私の養育態度の方がおかしいのではないか、必要なことは、きっぱりと実行して、あとは気分転換を上手にさせる方が健康的な暮らし方ではないかなどあれこれが去来し、このように正直に書きならべて来たことが、単に私個人の保育技術の拙なさを暴露しただけのことのようにも思う。

十七年前、児童学科の入試に臨んだ時、確か、小論文のテーマのひとつが、「保育者とは、萌え出たばかりの新芽を愛でる人」というような考え方をどう思うか、といった内容だったように思うのだが、入学の門をたたいた受験生に対して、このようにまっとうな問いかけをされる児童学科の先生方に対して、感激で心をうちふるわせたものだった。今、当時の約倍の年数を生きて、その小論文に課された事が、今、多少なりとも私の血肉となつて、身をもって理解しつつあること、実践に臨んでい

ることを、たいへんありがたく幸せなこととくみしめている。

昨今はまた、国民にとっての天皇制についての議論が盛んで、戦争責任論も往きかっているが、四十数年前、戦争にむかっていた時代に、良心的な保育者が、どのようにして芽達を守り、どのような苦しみの中で子供達の未来の姿を見通していかれたのだろうか、というようなことを、今に生きる私達は知る努力をしなくてはならないように思う。真に芽を愛でる人になるためには、社会に対しても、歴史の過去・未来に対しても、よく見きわめながら、芽達を守り育てる社会的な役割も担っていかねるようではならないと自戒している。



こあいさつ

この五月号が皆様に読まれている頃、私はオランダ、アムステルダム郊外アムステルフェーンで、夫と娘と三人で新しい土地での毎日を緊張の中で始めていることでしょう。

「暗い森の中をお母さんと手をつないで歩いている夢を見たよ。やさしい男の人の声が『もうすぐオランダだよ。』って教えてくれるの。」娘みづきの話です。オランダで小学一年生を迎える期待と不安でいっぱい娘との生活も報告したく思っております。

わずか一年三か月しか「幼児の教育」編集に携われませんでした、当誌を愛していられっやる多くの方々と接することができ、幸せな日々でした。長い歴史を持つこの「幼児の教育」誌が、今後とも多くの読者に支えられ、より発展なさることを、心よりお祈り申し上げます。

向山陽子

倉橋惣三「保育法」講義録、今月が最終講義となりました。編集にあたられた土屋とく先生、どうもありがとうございます。この講義録、各所で話題になりました。この講義録を読まれ、学習会を開くようになった現場の先生方もいらっしやるのか。編集にたずさわっている私共にとっても、うれしいことです。

来月号では、倉橋先生の講義を直接受けられた大先輩の方々から、倉橋先生のお人柄や講義のご感想などをおききしたいと思っております。読者の皆様方からのご意見、ご感想がございましたら、どうぞお寄せ下さい。

今月は「土」をテーマに特集を組んでみました。一日すごしても土にふれることが全くない生活をしている自分に気づき、いそいで植木に水をやりに行きました。都会では、土は公園とか、幼稚園とか、限られた場所にしかなくなりつ

つあります。小学校でさえ、花壇にしか土がないという所はめずらしくありません。生命のものと土がなくなるといふことは、生命がなくなるといふことにもなるのでしょうか。

以前、テレビで、一年かけてのお米作りを保育の柱とし、そこから生ずる様々なことを教材としてとり入れ、保育に生かしている園のことを拝見しました。田植えや草刈りは労働であるとともに、子ども達にとっては泥んこ遊びやパッタとりにもなります。最後は、収穫したお米で、おもちをついて食べます。一年間を通して土とふれあう毎日のつながりと、生命のつながりがみえました。

山田洋子先生の母のイメージ、いかがでしたか。この年になると母親も女同士の良き先輩という感じですが、子どもの頃には母のそばにいと安心したものでした。私の母は、強いて言えば後ろだての母でしょうか。

(K)

## 幼児の教育 第八十八巻 第五号

五月号

◎ 定価 四一〇円(税込)

平成元年 四月二十五日 印刷

平成元年 五月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 本田 和子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番  
TEL・二九二七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

## フレーベル館 特別企画

幼児教育の父 フリードリッヒ・フレーベル先生が教育の場とした各地を訪ね……  
教育の原点を再確認し、また東西ヨーロッパの幼児教育の現場を視察する旅

# ヨーロッパ幼児教育視察

1989年 7月26日(水)～8月8日(火) 14日間

東ドイツ・チューリンゲン地方・ニュルンベルグ・ミュンヘン・ザルツブルグ・ウィーン・パリ



ヨーロッパの幼稚園児たち



フレーベル博物館

### ●ごあいさつ

私たちを取りまく環境は急速なテンポで変化し、価値感の多様化が進んでいます。今、幼児教育に関わる私たちが、しっかりと腰をすえ、幼児教育の原点を見つめ直す時ではないでしょうか。

幼児教育の父といわれるフリードリッヒ・フレーベル先生がその活動の場とした、東ドイツ・チューリンゲン地方を訪ね、使用した各々の教育玩具や資料などを見学し、幼児教育のルーツをたどってみませんか。



フレーベル先生の生家

### 主な訪問地

フレーベル先生ゆかりの地

東ドイツ・チューリンゲン地方

- エアフルト
- バートブランケンブルグ
- オーベルバイスバツハ

西ドイツ

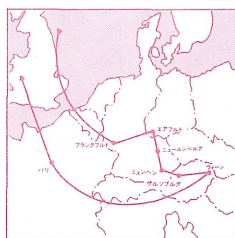
- ニュルンベルグ ●ミュンヘン

オーストリア

- ザルツブルグ ●ウィーン

フランス

- パリ



旅行期間 1989年7月26日(水)～8月8日(火)(14日間)

旅行費用 795,000円 (ローンによるお支払いも可能です。)

募集人員 25名 (定員になり次第締切らせていただきます。)

申込締切 1989年5月31日(水)

企画：子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

**フレーベル館**

旅行主権 **日本交通公社**

運輸大臣登録  
一般旅行業第64号

### ●お問い合わせ先

フレーベル館 ヨーロッパ幼児教育視察係  
東京都千代田区神田小川町3-1  
〒101 電話 03 (292) 7781(代)

日本交通公社 団体旅行新宿支店 (運輸大臣登録一般旅行業第64号)

ヨーロッパ幼児教育視察係

東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階  
〒160 電話 03 (346) 0181



日本人の精神文化の中に、脈々と流れる  
豊かな子育ての知恵を精選して収録！

# 子育て 名言名話集

全3巻

伊勢物語、今昔物語、宇津保物語、江戸笑話集などを中心とした第一巻、  
謡曲、川柳、説経節、おとぎ草子、平家物語など中世・近世を中心とし  
てまとめた第二巻。第三巻は、芥川龍之介、宮沢賢治、森鷗外、夏目漱  
石など明治・大正の小説を題材として、我々の祖先の子育てに関する考  
え方や慣習をピックアップ。現代の子育てに充分役立つ知恵を満載。

林 四郎  
桑原博史 著

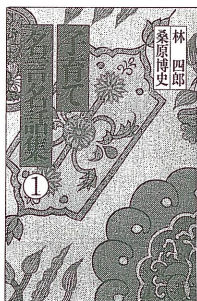
四六判 各二四〇頁  
定価各一、二〇〇円



子育て名言名話集②



子育て名言名話集③



子育て名言名話集①

※上記の価格に、消費税は含まれておりません。

くわしくは、フレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの  
フレーベル館